

第3段階の2

より良い明日の保育のために

月	日から	月	日までの改善点	組:
□環境 改善したいこと	□子どもの主体性	□支援の方法	□クラスの雰囲気	□園・クラスの運営
		具体的な行うこと		□家庭との連携
□環境 改善したいこと	□子どもの主体性	□支援の方法	□クラスの雰囲気	□園・クラスの運営
		具体的な行うこと		□家庭との連携
□環境 改善したいこと	□子どもの主体性	□支援の方法	□クラスの雰囲気	□園・クラスの運営
		具体的な行うこと		□家庭との連携

日本版SICSの幼児版利用と3歳未満児版作成
分担研究者 芦田 宏 兵庫県立大学環境人間学部教授

本研究は、Leuven 大学(ベルギー)の Ferre Laevers 博士たちが開発し、実施している保育の質向上のためのツールである SICS(A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings)を参考に作成した幼児版日本版を用いて、実効性を検証するとともに、3歳未満児版を作成することにある。昨年度の研究によって作成した幼児版を用いた研修会を開催し、参加園での利用を呼びかけ、その結果を議論する中で、3歳未満児版についても園内研修については同じ方法で行えると思われた。したがって、幼児版では「夢中度」を中心とした評定用 DVD を作製したが、本年度は3歳未満児版において、「安心度」を中心として研修用 DVD を作製した。

A. 研究目的

Leuven 大学(ベルギー)の Ferre Laevers 博士たちが開発し、多くの国で使用されている保育の質の向上のための自己評価法 SICS(A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings)を参考に作成した日本版(幼児版)の検証を通して、3歳未満児版の作成を行うことである。

B. 研究方法

1. 日本版 SICS(子どもたちのエピソードから始める自己評価法)を保育者を対象とした研修会において紹介する。
2. 参加者の自主的取り組みの報告会において、実施可能性について検討を行う。
3. 同方法の3歳未満児を対象とした場合の可能性を検討する。
4. 3歳未満児を対象としたビデオクリップの撮影と「安心度」を中心とした編集による DVD の作製。
5. ビデオクリップの「安心度」の評定の決定。

C. 研究結果

1. 兵庫県 H 市における保育士自主勉強会において「子どもたちのエピソードから始める自己評価法」について説明を行い、質疑を受ける。大変強く興味を持ったメンバーもいたが、個人参加

の勉強会であるため、園内研修という形で行うことには無理があるかもしれないが、同じ園の者同士で行ってみることとなった。

2. 2回目と3回目の自主勉強会で参加者がそれぞれの園で行った取り組みについて発表。各取り組みにコメントしながら理解の深化を図ったが、Form A から Form D までの使い方が十分に浸透できず、取り組みあたっては、スーパーバイザーの必要性を感じた。しかし、一方で保育士間での熱心な話し合いを行うなど、この自己評価法の特徴である、同僚との話し合いという点については十分に実践されており、取り組みもうとする熱意とそれに応じる同僚のいる園では、園内研修という形を取らなくても、実施できることを見いだせた。また、取り組みあたって、幼児、乳児という区別なく子どもの実態を見取ることでの自己評価法が利用可能であるという感触を得た。

3. 3歳未満児を対象としたビデオ撮影を行った。70シーンをビデオクリップとして編集し、研究メンバーで検討した。結果としてその中から 39 のビデオクリップを選択した。これを兵庫県 H 市の公立保育所の保育士で、3歳未満児保育の経験のある 16 名に視聴してもらい、「安

心度」「夢中度」の評定をお願いした。

4. 上記の結果を集計した結果、評定の一致度は「安心度」は 43.8%–100%、「夢中度」は 31.3%–93.8%であった。評定値の一致度が低いものがあるが、これは、今回評定して頂いた保育士の方々は、特にこの評定についてのトレーニングを受けた人たちではなく、日常の保育の中での経験に基づいて評定表の記述を参考に、前後の保育の流れが分からないビデオクリップであるがために、着目した点や、経験知の違いなどによって生じたものであると考えられる。経験年数の違いを元に集計をいくつか行ってみたが、特に、一定の傾向がみられたものはなかった。各ビデオクリップの評定の決定は、一致度が 60%を越えているものはそれを基準に行い、一致度が低いものは評定の分散を見ながら中間を取る形で行った。そして、今回の目的である「安心度」を中心とした DVD を作製するために評定の分布を考慮し、20 のクリップを選択した。

5. 選択した 20 のビデオクリップの評定について、評定のポイントとなった点について、評定を行って頂いた方の中から保育経験が長く、乳児保育の経験も十分あり、園長経験も長い 2 名の方と検討を行った。各評定の根拠となった視点、ポイントについて議論を行い、添付 DVD の評定理由について貴重な意見を得ることができた。

D. 結論

兵庫県 H 市の保育士の方々の協力によって、昨年度作成した日本版 SICS は、正確に実施するにはスーパーバイザーが必要ではあるが、熱意があり、やろうとする同僚がいれば、誰でも経験年数に関わりなく、取り組めるものであることが見いだされた。また、乳児を対象としても同じように行うことができる可能性を感じさせた。

そこで、3 歳未満児を対象とし、「安心度」を中心として評定するための参考となる DVD の作製の必要性を強く感じ、「社会福祉法人 あけぼの事業福祉会 あけぼのドロップス」の協力により、素材となるビデオ撮影を行うことができた。そして、それを元に H 市の保育士の方々の協力によって、「安心度」を中心とした評定トレーニングのための DVD を作製することができた。作製した DVD は本報告書に添付している。また、その各ビデオクリップの評定については「資料」としてこの報告の後に掲載している。昨年度作製した「夢中度」を中心とした DVD とあわせて、各園での自己評価のための参考となり、保育の質の向上に寄与することを期待している。

謝 辞

今回の研究にあたり、多くの方々の協力をいただきました。兵庫県 H 市の保育士の方々、子どもたちの様子のビデオ撮影に協力頂いた「社会福祉法人 あけぼの事業福祉会 あけぼのドロップス」の子どもたち、保護者の皆様、そして保育士の方々、末尾になりましたが、感謝申し上げます。ありがとうございました。

<資料>

シーン1

<ul style="list-style-type: none"> 自分の体を使って機嫌良く遊んでいるが、大きな歓喜の声を出しているほどでもなく、はつらつとして喜びにあふれているとまでは言えない。 	【安心度 4】
<ul style="list-style-type: none"> 機嫌良く遊んでいるが、声でする方に振り向いたり、保育者が通ると目で追ったりして、遊びに完全に没頭しているという状態ではない。 	【夢中度 4】

シーン2

<ul style="list-style-type: none"> 寝起きのような状態。強い不安感を示しておらず、泣いてはいないが、何かの関わりがあると泣いてしまいそうな状態。 	【安心度 2】
<ul style="list-style-type: none"> 友だちを見ているが興味を持って見ているようではない。今自分が何をしたいのかも発揮していない様子。 	【夢中度 1】

シーン3

<ul style="list-style-type: none"> 興味のあるものは目で追っているが、簡単に気が散ってしまっている。快適か快適でないかの明確な様子も見られない。 	【安心度 3】
<ul style="list-style-type: none"> 何も活動をしていないわけではなく、興味のあるものは目で追っているが、それに触発されて体を動かすなどの行動もなく、ぼーと見ている。 	【夢中度 2】

シーン4

<ul style="list-style-type: none"> 両手でかごを振って音を出したり、全身を使って遊びを楽しんだりしている。動きが生き生きとしていて、満足している。 	【安心度 5】
<ul style="list-style-type: none"> 全身を使って遊びを楽しんでいるが、かごが手から離れても特にこだわった様子はない。しかし、体全体を使っての遊びは継続している。 	【夢中度 4+】

シーン5

<ul style="list-style-type: none"> 他の子の泣き声やビデオカメラに気が散っているときもあるが、活動を継続しようとしている。積み木がうまく積めても、失敗しても大きな表情や態度の変化は見られないが、工夫して積もうとしている態度が伺える。 	【安心度 3+】
<ul style="list-style-type: none"> しかし、立ち上がって、積んだり、落ちた積み木を拾いに行ったりなどの行動は見られず、活動へのモチベーションが高いようには見えない。 	【夢中度 3】

シーン6

<ul style="list-style-type: none"> 表情が豊かで、機嫌が良く、満足して遊んでいる様子がかがえる。 	【安心度 5】
<ul style="list-style-type: none"> 近くに他の子がいてもまったく気にせず、遊びに没頭している 	【夢中度 5】

シーン7

<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きな場所を見つけて、寝転がった。しかし、不快感は示さないものの、満足しているという表情もない。 	【安心度 3】
<ul style="list-style-type: none"> 寝転がっているだけで、活動らしい活動をしていない。ぼーとしているわけではないが、自分の好きな場所に居続けているだけで、自分の能力を発揮するような活動はしていない。 	【夢中度 3】

シーン8

<ul style="list-style-type: none"> 楽しみながら電車を動かしている。チェーンを積んで運ぼうとしている工夫も見られる。しかし、同じ場所で遊んでいる子のすることが少し気になっているようで安心しきっているとは言えない。 	【安心度 4】
<ul style="list-style-type: none"> 同じ場所にいる子のすることが気になっているせいか、活動へのモチベーションも高いが、集中しきれていないように見える。 	【夢中度 4】

シーン9

<ul style="list-style-type: none"> 電車の模型を持って座っている。「ガタンゴトン」と口には出しているが、意欲的に電車を動かそうともしていない。不快を示してもいないが、快適に遊んでいるとも見えない。 	【安心度 3】
<ul style="list-style-type: none"> また、電車の模型を観察しているように見える場面もあるが、漠然と見ただけで細かい観察をしているようにも見えない。しかし、まったく活動していないわけでもなく、模型との関わりの姿は見える。 	【夢中度 2+】

シーン10

<ul style="list-style-type: none"> アヒルのおもちゃを引っ張って遊んでいる。満足して楽しんでいるが、ビデオカメラを見ると、緊張の様子が見える。 	【安心度 4】
<ul style="list-style-type: none"> 引っ張っているアヒルが引っかかると強く引っ張ったり、ひっくり返ると直したりするなどアヒルのおもちゃを引っ張る遊びに強い関心を持ち、行っているが、ビデオカメラが気になっている様子も見られ、集中が途切れている。 	【夢中度 4】

シーン11

<ul style="list-style-type: none"> 赤いエプロンをした子に絵本を取られそうになり、泣きながら取られまいとしている。そのまま、気持ちが立ち直っていない。 	【安心度 1】
<ul style="list-style-type: none"> 絵本を取られそうになり、逃げながらも絵本を開いて見ようとしている。そこへ絵本を取ろうとした子が近寄ってきて、また逃げ出した。絵本を読もうとする意欲に強いものがあるが、じゃまされている。 	【夢中度 2+】

シーン12

<ul style="list-style-type: none"> 淡々と、積み木を取りだして遊んでいる。表情の変化はなく、快適な快適でないかの様子も明確ではないが、休むことなく手が動いている。 	【安心度 3+】
<ul style="list-style-type: none"> 友だちやビデオカメラをちらちらと見るが、それで気が散ってしまうのではなく、継続的に積み木で遊んでいる。一箇所に積み上げるなどの目的性は明確ではないが、手に散った積み木の形に合わせて活動を変えている。 	【夢中度 4】

シーン13

<ul style="list-style-type: none"> 絵本を取りだして遊んでいるが、表情に変化はない。視線は周りへ向いていて、絵本を読むような仕草はない。しかし、絵本を片付けるところまで行っているところから、機嫌が悪いわけでもないことが分かる。 	【安心度 3】
<ul style="list-style-type: none"> 絵本を取りだして開いたりしているが、絵本を読むわけではなく、視線も他の方を見ている。特に目的があって絵本を取りだしたようでもなく、すぐにしまい込んでしまった。 	【夢中度 2】

シーン14

<ul style="list-style-type: none"> 眠そうにしているが、ぐずることなく、人の動きを目で追ったり、手元のおもちゃに手を伸ばしたりしている。機嫌は良いように見える。 	【安心度 4】
<ul style="list-style-type: none"> 手元のおもちゃに手を伸ばすが、思うように操作できるものではないため、持続しない。しかし、人の動きを追う目はしっかりしており、何かをしたそうにはしている。 	【夢中度 2+】

シーン15

<ul style="list-style-type: none"> おもちゃのところで遊んでいたが、保育士が他の子と遊んでいる声が聞こえると泣き出してしまった。途中、ボールを見つけ触ると泣き止むが、再び泣き出す。眠いのか、お腹がすいたのか、保育士を呼んでいる泣き方のように見える。 	【安心度 1】
<ul style="list-style-type: none"> 泣いているので、まったく活動はしていない。 	【夢中度 1】

シーン16

<ul style="list-style-type: none"> 小さいぬいぐるみのしっぽをくわえて、吸っている。何も出てこないが、それに不満の様子もなく、くり返している。表情に変化もない。 	【安心度 3】
--	---------

<ul style="list-style-type: none"> 絶えずくわえており、忙しくしているが、活動としてみると能力の発揮とも言えず、想像力を刺激しているとも言えない活動である。 	【夢中度 3】
--	---------

シーン17

<ul style="list-style-type: none"> 小さなぬいぐるみを持ち、鼻歌を歌うように声を出したり、しゃべったりして機嫌良く遊んでいる。 	【安心度 5】
<ul style="list-style-type: none"> 活動としては、ぬいぐるみを手にして楽しく遊んでいるが、特に何かに焦点を定めて遊んでいるわけではない。 	【夢中度 4】

シーン18

<ul style="list-style-type: none"> 楽しく遊んでいるところへ、じゃまが入って、少し不安な気持ちを抱いたように見える。しかし、それほど強い不安感ではなく、遊びに再び入っていける程度のもので、機嫌もそれほど悪くはない。 	【安心度 3】
<ul style="list-style-type: none"> じゃまが入って遊びを中断させられたが、再び遊び始めるなど、活動へのモチベーションは高い。 	【夢中度 4】

シーン19

<ul style="list-style-type: none"> ビデオカメラを見つめ、テレビ目線で楽しく満足して遊んでいる。ビデオカメラに向かって声を出しながら手を振るなど、表情も豊かである。 	【安心度 5】
<ul style="list-style-type: none"> ビデオカメラを意識しているが、滑り終わると、次の自分の順番を待っているなど、活動に強い意欲と魅力を感じているように見える。 	【夢中度 5】

シーン20

<ul style="list-style-type: none"> ままごと遊びを始めようかというところだが、となりの子がしているエプロンが欲しくなり、取ろうとしている。しかし、取れないので、強い不満感を示している。 	【安心度 1】
<ul style="list-style-type: none"> エプロンを取ることに必死になっている。しかし、遊びとしては何の活動もしていないと言える。ぼーとしているわけではないが、決して自分の能力を十分に発揮している状態とも言えない。 	【夢中度 2+】

日本版 SICS（幼児版）の国際的評定者間一致率の検討

代表研究者 秋田 喜代美 東京大学大学院教育学研究科教授

本研究は、ベルギーで開発された SICS を日本版として作成した DVD が、オリジナル SICS 作成者からみて実際にどの程度の評定の信頼性、内容の妥当性をもっているかを明らかにするために、ベルギーにおいて日本版へ評定を実施してもらい、比較検討を行なった。その結果、80%（21 シーン 中 17 シーン での一致）の一致率が評定者間の一致率として文化を越えて見出された。本結果は、日本版 S I C S がオリジナル S I C S の意図を十分に汲み、日本の保育にあわせて作成されたものであることが明らかとなった。

A. 研究目的

筆者らが開発した日本版 SICS はベルギーで開発された SICS の理念や方法に学びながらも、実際の日本の保育場面において DVD を作成し、また評定の方法等も本研究プロジェクトメンバーにおいて一致率が高かった DVD を選択し、その解説内容も全員で吟味をした上で作成を行なったものであった。この意味で日本内での一致率、ツールの信頼性は保障されていると考えられる。しかし日本版が、オリジナルであるベルギー開発の SCIS の作成者たちから見た時に、方法や評定の視座において、オリジナルと同じ視座をもっているのかと言う評定に対する妥当性、信頼性を明らかにすることは、一定の自己評価方法のツールの開発として、ツールの信頼性を考える上で重要であると考えられる。また差異が生じた場合にはその背景に保育への文化的見方による相違があるのではないかと考えた。そこでこの妥当性の検討を目的とした。

B. 研究方法

オリジナル SICS の作成や開発を手がけた Ferre Laevers 教授ならびにその研究所職員に日本版の DVD ならびにその評定の規準となった解説（日本語を英語に訳した内容を添付）を送付し、実際にベルギーでの評定を送付してもらい、その理由の比較から検討を行なった。

C. 研究結果

評定結果の異同は表 1 のようであった。

表 1 日本ビデオへのベルギー・日本評定の一致・不一致数

両者評定	対象クリップ数
同一評定	11
0.5 点の相違	6
1.0 点の相違	3
1.5 点の相違	1
全体	21

本結果からは 21 のクリップのうち 20 クリップが 1 点までのずれであり、この評定からは、国や文化をこえて、子どもの夢中・没頭をとらえる視座にはきわめて高い共通

性がみられることが明らかとなった。これらの評定において、ずれの箇所のいていずれかの国がつねに高い評定をしているということではなく、日本の方が評定が高いクリップ、ベルギーの方が評定が高いクリップの両者が存在していた。したがって両者はそれぞれの判断根拠によって正確に評定を行なっていてどちらかが甘い評定をしている傾向をさしているのではないことがわかる。

そこで評定が同一でなく、0.5点から1.5点までのずれが生じた原因を両者のビデオ評定理由をつきあわせることでみられた原因として3点をあげることができる。

第1には、対象児が行動せずあるものを見ているという状況をどのように評定するのかと言うことの差である。みるということがきわめて能動的な行為であるとの認識からベルギーの方がこの理由での評定が高い。これに対して日本の方が見ることの能動性は認めているが、文脈と子どもの行動から評価をしているという相違がみられた。見ること、観察することの価値をどのようにみるのかは今後さらに議論の必要性があると、両国の研究者で議論になった点である。

また第2には、非言語的なサイン、表情の読み取りである。退屈な表情やまなざしなどから感情の表出をいかによみとるかには文化的サインが影響している。

そして3点目には、2点目とも関連はしているが、ビデオクリップは時間的な流れの幅をもっている。したがってそのクリップ内でどこを特に重点として評定しているのかによって、評定に変化がみられる。これは文化的差異というよりも、このビデオクリップで捉える方法論的難しさであると

もいえる。

しかしながら、その中で比較的高い一致率を得たことから、本DVDが当初の理念と合致したものであることが示された。提唱者のラーバー教授によれば、他の国でもその国固有のDVDが作られているが、その時の方が一致率が低く、今回のDVDが一致率が高かったのは、一つには撮影されたDVDがポイントが明確で焦点が絞られている映像であったためではないかということであり、また2点目には数多くのクリップの中での映像選択が明確であったためではないかとの指摘があった。

本SICSの研究については、台湾とも共同研究を行なっているので、今後台湾の共同研究者にも日本版の評定をしてもらうことによって、さらにこの評定の比較検討を試みることで、自文化で自明となっている行為の固有性を意識化できるのではないかと判断できる。

本DVDは導入のためのものであり、各園が自園でエピソードをえらんだり、撮影し記録することがこの方法ではもっとも大事になるが、その時のカメラワークのこつやアングル、場面選択の方法の重要性を伝えることも、今回評定をしてもらったことで明らかになった点ということができよう。マニュアル等をさらに改善する際に本考察を生かしていきたいと考える。

保育の質尺度の台日比較調査研究

共同研究者 幸 曼玲 台北市立教育大学

台湾の共同研究者によって日本で開発したSICSを用いて実際に研修をおこなってみてもらふこと、また台湾においてもLaevers教授の尺度をもとに開発することで両者の国の比較文化研究を行なうことを目的に研究を実施した。その結果として、日本版は台湾の研究者からも評価された一方で、より多文化の状況をもつ園での実施や保育者だけではなく保護者にも使用が可能ではないかといった点が明らかになった。また台湾でのビデオクリップ使用によって、保育者が子どもの学習に対してより一層目をむけるようになった点が報告された。

A. 研究目的

第1は、日本において作成開発する保育環境の質尺度SICS（Self-evaluation Instrument for Care Settings）を台湾において幼児園および保育所の園内研修で継続実施し、台湾での本質尺度使用の効果を検討すること、およびこの質尺度の妥当性に関して保育所施設長に調査を行い、尺度の課題や内容の相違を報告してもらうことである。

今回開発する保育環境尺度は、日本の保育と保育課程を意識し保育環境に目をむけた尺度であり、いわゆるECCERSのように何が準備されているかではなく、子どもの活動の有り方（安心感と集中）から環境のあり方を問う尺度である。台湾は平成21年に幼稚園と保育所の一体化を決定し現在一元化教育課程が検討され、その際日本の幼稚園教育要領と保育所保育指針を参照しつつ作成され検討されている段階にある。また保育環境の質についても、2000年から行政がすでに実施してきており、評価に

関する研究については日本よりも一歩進んだ段階にある。この意味で世界において、とりわけアジアの中で最も日本と近い保育所カリキュラムを持ち保育所と幼稚園の両面の性質を検討できる国であるため台湾研究者との共同研究を実施した。

幸曼玲教授は、この台湾政府の幼児教育課程編成委員会の座長を現在務めており、中華民国幼児教育を代表する幼児教育改革研究会の理事長を一昨年までつとめており、日本にもこの4年間毎年来日しており日本の保育環境にも詳しい。日本に保育所保育指針に最も近い内容の教育課程との比較研究の視点から、保育環境の質尺度を検討することは、アジアの幼児教育におけるSICS尺度の開発と研修利用という意味で有用な意味を持っていると考えられる。そして日本の分担協力者が現地を訪問して調査を実施するよりも、園内研修での活用や園長の声をくみ上げる点でもより効果的であると判断した。そこで実際には幸教授とともに、すでに筆者らがよく知

っている

、幸教授のもとで研究アシスタントや RA として研究を行なっている 2 名の助手および博士院生の方に、幸教授をサポートして実際の研究調査を実施してもらった。

第 2 には、保育環境の質を自己評価し検討していくための保育の質や保育者と園児との相互作用に関わる台湾での DVD 作成である。幸教授はオハイオ州立大学で博士号をとり、申請者と同じ心理学分野を専門とする研究者であり、台北市での園の質評価の実施委員でもあるので、そこでの良質の園での保育記録を撮影することも可能であると考えられる。

B. 研究方法

母子愛育財団からの共同委託研究助成（平成 20 年度）を受けて、保育研究者である幸教授と問題関心を共有し、日本の保育尺度の特徴、台湾で開発した SICS との比較から、保育の質に関する台日比較を行なうと言う方法を行なった。ヨーロッパ幼児教育学会や台湾と日本の相互訪問によって打合せを実施した。

C 研究結果

以下は、幸教授から中国語で送付された報告要旨の日本語訳である。

1 台湾からみた日本版 SICS の特徴

日本の幼稚園教育要領、保育所保育指針によると、保育者は、以下の事項を重視して教育課程・保育課程を編成しなければならない。(1) 幼児の主体性の確保 (2) 幼児行動への理解 (3) 幼児と人やものとのかわりが重要であることを踏まえ、保育環境

を計画的に構成しなければならない (4) 幼児ひとりひとりの発達状況を重視し、活動内容を適切に調整し、その学習を豊かなものに行なければならない。課程の実施に関しては、「遊びによる教育」とは明示されていないが、各領域における実施原則は、遊びと環境とのかかわりに注目し、遊びを通して学習することを強調するものが多い。幼児を理解し、その能力に応じて学習環境を構成し、活動の発展や改正を図り、計画的に課程の編成をしなければならないため、幼児の行動観察は保育者に必要な能力となっている。今回、保育所および幼稚園の質向上のツールとして、Dr. Lavers の SICS を取り入れた自己評価法を導入し、園を中心とした自己評価行動チームを構築することは、世界の流れをつかんだ突破口と位置づけることができる。将来、各園が自己評価の基準とし、外部評価の基準として本方法を採用するならば、更なる効果を発揮できると考えられる。

改編された日本版の SICS は、台湾の研究者の視点から見ると以下の特徴をもっている。

(一) 保育者の負担を考え、オリジナル FORM A の一度に 10 人を観察し評定する方法を、一度に 2 人の評定へと変更することで、幼児の行動観察やエピソードの記録が容易になっている。それに加え、日本の保育所や幼稚園はエピソード記録の経験や伝統的習慣が歴史的にあったため、それをベースに幼児の「参与度（台湾版用語。日本語版の夢中度に相当）」と「幸福度（同。日本語版では安心度）」を評価できるので、保育者の負担にはならないはずである。

(二) 日本の状況を踏まえて、改編を行った。たとえば FORM B の「マイナス度」

や「不足」などの言葉は保育者たちを傷つける恐れがあるという園長のコメントを参考にし、研究チームは評価点を表の中央に置き、表現を「安心度と夢中度の判定が高いと判断した視点」と「安心度と夢中度がより高くなるための視点」に修正した。日本の保育者の管理者たちが如何に保育者のことを大切に思っているのかがよく分かる。日本ではなるべくポジティブな経験と保育者とを結び、励ますような口調で保育者とコミュニケーションをとっている。保育者がこのようなポジティブな思いを感じれば、自然にポジティブな空気が幼児との間に生れるのであろう。いずれにしても、研究チームがこのような日本の長所を伸ばせるよう、日本の環境に適合するように改編したことには、脱帽の思いである。

(三) **FORM C** の項目は日本での保育・教育課程の実際状況に応じて、修正されている。「幼児は外遊びあるいは室内遊びを選択することができる」、「文化の多様性是一目瞭然である」といった部分が削除され、代わりに「家庭との連絡」等の項目が追加された。

(四) **FORM C** の日本語への翻訳の適切性の評定を保育者が行い、多数の同意を得ている。「適当である」または「まあまあ適当である」という意見が60%以上を占めている。

(五) **FORM D** の「改善点」を強調する方向は、園長等の提案により、「現状で優れているところ」と「改善したいところ」に変更され、行動計画を立てることの大切さを強調した。園が努力してきたことを肯定し、全員が更に精進するようという励ましの思いが感じ取れる。

(六) 65本もある現場撮影ビデオから

25本を選び出し、編集してトレーニング用ビデオにした。撮影と編集がよくできており、非常に使いやすくなっている。

(七) **SICS** マニュアルを日本語に翻訳したが、実施のステップしかなく、活用するには物足りなかつたため、研究チームは更に英語版にないDVDバージョンのマニュアルを製作した。DVDバージョンのマニュアルは幼稚園や保育所に**FORM ABCD** が記入された後、話し合いの実際の仕方を提供している。そして保育活動について討論する際に、個別の保育者に焦点を当てるのではないこと、また行動計画を話し合う際に、観察によって得た証拠を検証できるということを保育者たちに気づかせ、印象だけで判断しないようにすることができる。討論の過程も時間を考えて二回に分け、**FORM B** に対して集中的に討論することで、焦点を特定の保育者に当てないようにしている。

この日本版での修正に関して、以下の点を比較文化的視点から指摘することができる。

(一) **FORM C** で修正された「文化の多様性是一目瞭然である」などの項目に関しては、保留の余地があると思われる。理由の一つは、たとえばインターナショナルスクールなどをはじめ多文化状況を引き受けている園では、幼児は様々な国から来ているので、それぞれ違った文化をもっている。つまり、この項目を必要とする教育現場もあるはずであることである。もうひとつは、多文化教育は世界の流れであり、幼児は教室で他の文化と接触し、それを受け入れることも必要になるかもしれないからである。さらに文化の定義を広げて言うと、異なる家庭背景をもった幼児も、それぞれ違った

文化を保有している。恵まれていない幼児、あるいは心身の不自由な幼児も一つの文化の代表である。ゆえにこの項目を保留し、園の自由選択とすることを勧めたい。

今回の改編は非常に周密であり、苦心の跡がうかがえる。特に日本と現場の状況を踏まえて修正するなど、台湾にとってこれ以上の手本はないといえるほど、読んで得るものが多い。

2 台湾版 SICS の改編過程

日本語版の SICS の改編の厳密さに対し、台湾版のポイントは少し違う。台湾は日本と状況が異なるため、SICS の使用に関する考え方も多少相違する点がある。台湾では、幼稚園や保育所に対する外部評価はすでに実施されており、教育課程と教育過程を評定するための基本視点もすでに構築済みである。そのため、SICS を使用する目的は日本と少々異なってくる。古くから中華民族における保育者とは、「傳道（道を伝え）」「授業（業を授け）」「解惑（惑いを解く）」ものであった。保育者の指導方法は「告知」、保育者は「権威」であり、学習は「伝授」によるものである。「遊びを通じた学習」は中華文化に相反する概念である。「業經於勤荒於嬉（学業は勤によって営み、嬉によって荒廃する）」という言葉があるが、「嬉」とは「遊び」のことである。台湾は日本と異なり、倉橋惣三のような幼児教育の父と呼べるほどの人物はいない。台湾には「張雪門」、中国には「陳鶴琴」がいたが、いずれも歴史の中で忘れ去られてしまった。従来の保育者を中心とした文化概念が、「幼児」を学習の主体とする概念の推進を困難にしている。また、保育者だけが幼児を「見る」ようにな

るだけでなく、保護者にも「見せる」必要がある。SICS なら保育者の力になって、幼児の学習「過程」を保育・教育課程と教育とを直結させ、保護者に幼児が学習過程において、「深い学習」を経験している具体的なデータを提供できる。

台湾版改編のプロセスは、以下の通りであった。

- (一) 日本語版を中国語版に翻訳し、英語版の訳文と対照しながら、違うところをチェックし、台湾の状況を踏まえて修正する。
- (二) 表現および FORM C の内容修正を行い、「幼児は外遊びあるいは室内遊びを選択することができる」、「原則として兄弟が同じ園に入園する」という両項目を削除する。
- (三) 評定に関するトレーニング用ビデオとしてビデオクリップの試験的撮影を行う。
- (四) FORM ABCD を実際に使ってもらい、実用性に関する意見をきく。
- (五) 研究者によるチームを結成し、日本と台湾が各自撮影したビデオを分析し、評定に関する方法の一致性ならびに撮影視点および角度などを考察する。

その結果は以下のような点が明らかとなった。

- (一) 保育者たちからはとても使いやすいというコメントを述べた。長年、保育者たちはカリキュラムの作成および実施に苦心し、幼児の反応を疎かにしていた。参加度を評価することで、保育者は幼児の学習時の状態に注意するようになった。そして観察する目を幼児の社会的発展から、その「学習過程」へ向けることができるようになった。

(二) 台湾における幼児教育モデルは様々だが、自由活動（遊び）と学習との連携は弱く、参与度のばらつきが激しい。学習に関連する活動は「団体」か「グループ分け」に集中しており、クリップ撮影には苦勞した。

(三) トレーニングを受けたことのない保育者が幼児を評価する(FORM A B C D)場合、エピソードの記録がないと難しい。しかしビデオによるトレーニングを行えば、直接点数で評定することができるようになり、記録する時間を節約することができる。

(四) 長時間の観察において、活動に対する幼児の参与度は変わり続けるため、どのように評価すればよいか。

(五) 教室の一員でない限り、二分間のビデオだけで、活動に対する幼児の参与度を評価するのは難しい。幼児が参加しているかどうかは活動目標と関係があるからである。

(六) 教室の一員でない限り、どの活動が「定例」の活動なのかを判断することは難しい。

(七) グループディスカッションの最中の、幼児の参与度を判定することは難しい。幼児が呼ばれるまでの反応は、習慣によって異なるからである。指をいじる幼児がいれば、うつむいている幼児もいる。しかし他の人の発表を聞いている可能性も否めないで、評価するのは難しい。

(八) 読書などといった静的活動は評価しにくい。

(九) 取っ組み合い遊び (Rough & tumble play) などの活動の参与度は評価しにくい。

(十) 幼児の参与度を評価するとき、保育者が「こうあるべきだ」という視点から

考えたほうがいいのか、それとも幼児の視点で考えたほうがいいのか。

(十一) 本研究では、幼児の外見的行動によって「幸福度」の程度を定義しているが、「必要以上の資源を与えられている」ことが幸福の定義となることもある。特に東洋の子どもの外見的行動はあまりはっきりしていないかもしれない。笑うことに慣れていない幼児は、「幸福」といっていいであろうか。

(十二) 歌っていないが自信をもって工作している幼児もいるが、「幸福」といえるのであろうか。

研究過程においてはまだはっきりすべき点はあるが、SICSは、特に「参与度」に関する部分の実用性は非常に高いといえるであろう。

D 考察

日本の幼児教育カリキュラムと世界中で最も類似性の高いカリキュラムをもち、アジアで最も早くから評価システムを幼児教育に導入した台湾の研究機関に委託したことによって得られた成果は、日本だけではなく、アジアの国々においても今回の日本版は有用であることを示しているといえることができる。たとえばエピソード記録の方法の導入などが、評価されていることから、むしろ日本の伝統だけではなく、アジア的な保育観や方法においても有効であることが示唆される。

また申教授から、まず第1に保育者が子どもの学びの過程をとらえられるようになる点が指摘されているが、研修利用によってどのように保育者の子どもの見方が変容したかを検討する、それを比較するという形でさらに研究に入れていくことができる。

また第2に保護者に見せるための効果を持つという指摘である。この点はこの研究当初には想定していなかった視点であるが、今回の委託成果をうけ、保育者の保護者への関与の変化をとらえて分析することで本尺度の意義をさらに明らかにすることができると考えられる。第3には、多文化保育と尺度の項目との関係である。今回の日本のパイロット研究協力園はいずれも、単一文化園であった。今後の研究では可能なら多文化視点からこの尺度項目を再度見直してみることも必要だという視座を得ることができた。

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）
総合研究報告書分担研究報告

撮影園での園内研修実施の分析

分担研究者 門田 理世 西南学院大学人間科学部准教授

本研究では、Leuven 大学の Ferre Laevers 博士たち EXE チームが開発した保育実践の自己評価法：SICS（A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings）を参考に作成した日本版 SICS を、撮影園での園内研修において試作的に実施した結果、保育者は互いの保育実践の意図を確認し合うというだけでなく、子ども理解の視点が保育実践にどのように影響を与えるのかを理解し、そしてそれらが明日からの保育で実際にどのように意識され工夫されていくのかを保育者が互いに見守り合う、という視点を得ることができた。

A. 研究目的

本研究では、Leuven 大学（ベルギー）の Ferre Laevers 博士たち EXE チームが開発した保育実践の自己評価法：SICS（A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings）を参考に作成した日本版 SICS（芦田の報告書を参照）を、西南学院早緑子供の園の園内研修として試作的に実施したその分析結果を報告する。

なお、この分析結果は、2008 年ヨーロッパ乳幼児教育学会（EECERA：European Early Childhood Education Research Association, Norway）において発表された（発表に使用した資料を資料 1 として添付しておく）。

B. 研究方法

研究手順は以下の通りである。

1. 西南学院早緑子供の園にて主任を中心とする保育者を対象に、日本版 SICS の説明及び実施の手順の説明を行った。同時に、園内の子ども達を対象に

- 『夢中度』『安心度』評定用 DVD の素材場面の撮影を行った。
2. 主任及び保育者達は、編集された評定用 DVD を 3 週間後に設定された園内研修会までに視聴し、『夢中度』と『安心度』評定基準の共有化を図った。加えて、対象児のエピソード記録を撮り、記録ごとに評定を行い、園内研修に持ち寄った。
3. 保育者は、いつもの園内研修の形式で（主任が進行係）SICS 日本版の実施方法試案に基づいて園内研修を行った。園内研修の様子は、保育者の同意の下、ビデオ及びオーディオ記録された。
4. SICS 日本版を用いた園内研修を終了後、SICS 日本版実施の率直な意見・感想を交換し合った。この意見交換会も保育者の同意の下、ビデオ及びオーディオを記録された。
5. 本研究における分析対象は、
 - 保育者各人が撮ったエピソード記録（資料 2 参照）を含む、日

本版 SICS・Form 集に記載された直筆の記録全て

- 日本版 SICS の実施の手引きに残された保育者のメモ書き
- 園内研修及び研修終了後の意見交換会におけるビデオ・オーディオ記録。これらは文字化された。

C. 研究結果

分析の結果、大きく以下の6つの知見が得られた。

1. 誰もが一定の手順に乗っ取って保育の質を自己評価する方法を確立する重要性：

「適当な順番で選んだのがまおちゃんだったのですが、彼女を今回観察してみてよかったです。いつも私が観察対象として見てしまう子は、私が何らかの関心を寄せている子ばかりにどうしてもなってしまうので。」（クラス担任 M）

日本版 SICS では、『特定の子どもを指定するのではなく、名簿の順で3のつく子とか、〇月生まれの子のように、偶然に決まるようにしましょう』（実施の手引き参照）と書かれている。このように一定の手順を踏むことで、日頃の保育で無意識のうちに生じている保育者自身の偏りを少なくすることができる。

「日本の実践は往々にして直感的に、時に、より情緒的に、分析されたり議論されたりする。」（無藤、2008）

2. 自明のものとされていた側面の見直し：

比較文化研究でよく取り上げられる理論であるが、この研究では保育者が日本版

SICS を用いることで、これまで当たり前のこととして見つめてきた保育内容、指導形態、子ども理解などを違った視点で捉えなおす姿が見られた。

「私は Form C が勉強になりました。どの領域や側面を評価対象として見なければならぬのかが挙げられていました。中には今までに考えたこともなかったような項目があって実践をこうやってみていくのだなと思えたことが収穫でした。」（クラス担任 U）

Ayers (2001) は、自明の文化を見直すことの重要性を以下のように挙げている。

我々は、深く理解した状態から表面的な理解の状態へ移行しながら自分たちの文化を体験している。（中略）しかし、自分たちの知らない世界に出くわすと、まず、我々はその表層の部分だけを見てしまい、その出来事の深層・真意を理解できずに終わってしまいがちである。このことも、また、文化や人々を見えないものにしてしまっている（p. 76）

3. 保育者の語りの変化：

日本の保育者は、子ども達の発達を社会性において言及することが多い（例えば、他の子ども達とどうかかわっているのか、仲良く遊んでいるのか）。今回、日本版 SICS を通して、子どもの社会性ばかりに目を向けていたのに環境とのかかわりによって変容する予測を立てるような語り変わった。

4. 批評眼をもって反芻することで得られた新しい視点：

「今回、彼女を観察してみて、自分がいかに子ども達のことを十分に考えていない

かに気づいた。特に、彼女は今どんな気持ちでクラスに要るのだろう、とか、最後までひとりで活動を終わられるような環境を構成するにはどうすればよいのだろう、といった視点がなかったことに気づいた。」
(クラス担任 C)

保育者が自分自身の保育実践を今までとは違って観点で語るようになったことが視された。

5. 記録の意義 (特に、エピソード記録) :
保育者各自がどのような記録をとったのか、実例をいくつか資料 2 として挙げた (資料 2 参照)。

以下は、記録者として各クラスに入って保育者と同様に観察記録を撮った主任のコメントである。

「観察したものをエピソードに落とすことで、時間の短縮が図れたような気がします。従来の園内研修は、皆で同じ保育を観察する時間を見つけるのが大変でした。この方法だと同じものを場面を共有したことにはなりません、ビデオで記録に撮ってきたものを一緒にみる作業よりはずっと容易に思えます。

それに、あんなに短いエピソードからあれだけ多くの課題や問題点が見えてきて、色んな角度からそのことを議論するシステムに驚きました。」 (主任 T)

6. 一つのチームとして子ども達の育ちに責任を持つことの重要性 :

「私はクラス担任ではありませんが、エピソードを他の先生方と一緒に読んで、今まで知らなかったその子のことが前よりもっとよく理解できるようになりました」
(クラス副担任 Y)

I

7. その他 :

- 視覚的効果 (実践を評価することの功罪 : 意識を明確にできる・実践を数字に置き換える抵抗感)

日本の保育には、実践の観察しそれを記録として残す伝統がある。これら記録は、子どもの成長や実践の軌跡を語る重要な資料 (ドキュメンテーション) として扱われる。そして、その記録に基づいて、保育者は自分自身の実践を省察したり、子ども理解を促進させたりしている。しかしながら、これらの行為は園内研修にて口頭の話し合いですまされることが多く、また、筆記された記録を面前において一定の手順に従って分析・省察を行うことは少なく、まして記述記録を視覚的に捉える手法 (例えば、5 段階の数値化、◎○△などの記号化) で実践の評価を行うことは非常に稀である。としてそのまま用いられることが多い。

今回の日本版 SICS の実施後の意見交換会において、保育者達はこうして実践を視覚的に捉える功罪について、「子どものどの発達領域にもっと眼を向けるべきか、私はどうかかわった方がよかったのかなど、何を改善すればいいのかが一目瞭然でわかりやすい」 (クラス担任 F) 「ただ、はっきりと視覚化されることで、よい箇所はそれでいいと思うが、1 がついたり△がついたりすると私はダメなんだと必要以上に認識させられてしまうのは少し辛い感じがする」 (クラス担任 M) と発言している。このように自分自身への省察と受け止めることが難しいと感じる保育者もいたということは、保育者は評価にさらされることに一抹の不安を抱くナイーブな存在であること、

そして、その点に配慮してこの評価法が用いられるべきであることが示唆されたと言える。また、従来の園内研修がいかに口頭での意見交換に終わってしまっていたかを保育者に気づかせたことも興味深い知見であった。

- 評価法というシステムの確立：

日本版 SICS では、エピソード記録という保育者自身の観察に基づく記録を『安心度』『夢中度』という評価観点から、ある一定の評価基準を用いて実践の過程を評価し、その結果を実践に返していく手だてまでを保育者に考えさせている。今回、この一連の評価法を園内研修として用いたことによって、システムに乗っ取って実践を分析という方法が、

- 保育者に子どもの発達を意識させ、子ども理解を促進させる
- 保育者に自身の指導方法を振り返らせる

ことを可能にしたが、特筆すべき点は、

- 具体的にどのように実践に返していくのか、その手だてを保育者がプランとして書き上げることによって、明日の実践をより具体的に意識するようになった

という点であろう。

このように、ある一定の決まりによって分析するという行為は、これまでの園内研修や子ども理解、自身の保育実践を振り返らせただけでなく、保育者個々に明日の実践を向上させていく具体的な手だてを持たせ、そのことを明確に意識させた。また、園内研修という場で分析した情報を交換し合ったことによって、保育者各々の明日からの保育を互いに意識し見つけ合おうとす

る風潮が生まれたことも示唆された。

D. 結論

今回の日本版 SICS の実施によって、保育者は互いの保育実践の意図を確認し合うというだけでなく、子ども理解の視点が保育実践にどのように影響を与えるのかを理解し、そしてそれらが明日からの保育で実際にどのように意識され工夫されていくのかを保育者が互いに見守り合う、という視点を得ることができた。今回、日本版 SICS の実施後の保育実践がどのように変化し、また、保育者の意識がどのように変革したのかまでは調査していない。従って、日本版 SICS によって保育の質が向上されたのかどうかを検証するためにも、継続的に実践に取り組む保育者の姿を追跡調査してみる必要性が示唆された。

謝辞

今回の日本版 SICS の実施や研究調査に理解を示し、快く引き受けて下さった西南学院早緑子供の園の先生方、子ども達や保護者の皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の汎用性と継続性を探る

保育者 A の自己評価記録から

門田理世 (西南学院大学)

本研究は、一度園内研修として「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を実施したことのある私立 C 保育所において保育者 A が自主的に自己評価として「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を用いた記録から、「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」の汎用性と継続可能性を検討した。その結果、個人向けの自己評価法としては、保育者個々が自己内対話を充実していけるような視点を検討し、盛り込んでいくことで保育者個人が行う自己研修を支援していける可能性、及び、園内研修を通して他の保育者と刺激し合って学び、保育者個々が保育実践に対する自己内対話を定着させていくことが自己評価を継続していく鍵になることが示唆された。

A. 研究目的

本研究は、一度園内研修として「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を実施したことのある私立 C 保育所において保育者 A が自主的に自己評価として「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を用いた記録から、「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」の汎用性と継続可能性を検討するものである。

B. 研究方法

対象：私立 C 保育所に勤務する保育者 A

期間：2009 年 7 月～8 月 (保育者 A が「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を用いて自己評価を実施した期間) 及び 2010 年 1 月 (保育者 A がインタビューを受けた期間)

方法：保育者 A が個人の自己評価を行うために用いた「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を、どのように使用していたのかを記録とインタビューから検証し、「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」の汎用性及び継続可能性についての考察を行う。

C. 研究結果

1. 保育者 A の「子どもの経験から振り返る保育プロセス」に対する経験と認識

保育者 A の勤務する私立 C 保育所では、過去に職員全員で「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を用いた園内研修を行ったことがある。保育歴 3 年目の保育者 A もその中の一人として参加しており、「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を何の目的でどのように用いるのか、その理念と方法に関しては一定の理解を示している。その後、園全体で再度「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」を用いた園内研修を行うことはなかったが、保育者 A は自己の保育実践を見つめなおす手法として有用ではないかと考え、自分自身の自己評価として用いてみることにした (インタビューより)。

保育者 A は前回参加した折に、「子どもが活動の中でいかに安定して夢中になって自分の思いを遂げられているかは保育者として知っておく必要がある」と感じ、「記録して検証するプロセスは大変だったけれど色々な発見があって面白かったので、一人でもう一度やってみたらどうだろう」と単独での実施を試行したとのことである。

2. 「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」の用い方とその理由

以下は、保育者 A が「子どもの経験から振り返る保育プロセス (日本版 SICS)」をどのようなプ

プロセスでどのように用いたのか、要点ごとに詳述する。

(1) ビデオ記録なし：今年度、初めて乳児クラスを離れて幼児クラスを担当することになった保育者Aは、「まだ入って間もないクラスの中で、自分自身の保育中にビデオを設置して撮影することは難しいと思った。他の保育者も忙しい中お願いするのは気が引けたし、自分の保育を自分のできる範囲内で振り返りたいと思っていた」という理由から、記録としてビデオ撮影を行うことは割愛された。

(2) Form A への取り組み：そこで、まず保育者Aは名簿順に男女それぞれ2名ずつ4名の子ども達を取り上げ、観察記録を取ることから始めた。いくつかのエピソードを保育中にメモ書きし、その中の一つをForm Aに詳しく記載した。その記録を読み直し「夢中度」と「安心度」の評定を書き入れた。以下は、保育者AのForm Aに対する感想である。

(保育者A)

日頃から観察をとることは園内研修でやっているのですが、それは難しいことではなかった。「子どもが夢中になって活動しているか」「安定して落ち着いて活動しているか」という観点を持って、子ども達の姿を数字で評価するという過程が、頭では理解できていても心情的に受け入れることに抵抗があった。しかし、子ども達の姿は私の子どもに対するかわりの答えなのではないかと思うとこの数字は私の足りないところをわかりやすくするための方法だと捉えるようになり、抵抗感が少し薄らいだ。

(3) Form B 及び Form C への取り組み：「大雑把すぎてメモ程度の気付きしか書けなかった」と振り返る保育者AにとってForm Bを一人で書き上げることは困難であったのか、Form Bは殆ど空白であった。保育者A自身、Form Aで書き上げた観察記録を分析する観点を与えられたことは有用であると感じていても「集団でやったときとは違って、分析と言えるほどの多くの視点が出てこない」ことに戸惑って

いるようだった。むしろ、「Form Cは自分一人でも細かい観点を見直せるのでためになるし使いやすかった」ようで該当しない項目を除いては、全てに印がつけてあった。興味深かったのは、保育者AのForm Cの位置づけである。保育者Aは、Form Cをつけながら、Form CのForm A及びForm Bとの関係性に混乱していたそうである。今回は、前回の園内研修とは違って他の職員と語り合う場面がなかったため、まずForm Bでつまづいた。そのため、Form Bを踏まえて行うForm Cは、個人で行う際、何を対象として行うものなのかが分からなくなってしまったという。結局、自身のとったForm Aのエピソードや評定を対象としてForm Cで挙げられている観点を見直そうとしたのだが、エピソードには出てこない観点に関してはどうすべきなのか。自身のクラス全体を対象として見直すべきなのか。観察記録のない状況で分析することは、根拠のない思い込みにはなってしまわないかという混乱を生じたとのことである。「エピソードとは関係ない日頃の保育のことが含まれてもいいのか」「クラス全体の記録がないのにクラス全体を見直してよいのだろうか」と困惑した姿が報告された。

(4) Form D への取り組み：Form D への取り組みに関して「自分自身の保育をほめることは難しい」というのが保育者Aの第一声であった。「子どもの姿が答えなのだ」とすると、そこからよいと思われる部分を書き出せばよいのだろうが、もっと自分の保育をよくしたいと思っているので、よくないところを見つめたい」という指向性を持つ保育者Aには、現段階でよいと思われる点に関しては書きにくかったようだが、改善したいところと明日から具体的にを行うところの欄に関しては「大変ためになる」と受け止めていた。

3. 全体の流れを通して

一人のできる範囲で「子どもの経験から振り返